

H27・8・11

第1号

通巻135号

学院通信

発行
金光学院
719-0111
岡山県浅口市
金光町大谷1486
TEL (0865) 42-3115
FAX (0865) 42-3114



広島平和学習 (原爆ドーム)

「出会いの中で」

金光学院院長 堀尾 光俊



「人は、出会いによって変化する」と言われている。それが時として、人の人格形成の上で良くも悪くも大きく影響することがある。

江戸の大泥棒・石川五右衛門が、子どもの頃寺子屋に通っていたときのこと。ある日いつものように帰ろうとして、寺子屋の玄関に降り立った。自分の履いてきた、使い古しのわらじの横に、編み上げられたばかりのきれいなわらじが並んでいた。だれも見えないその隙に、思わずそのきれいなわらじを履いて飛び出した。わが家への道中、「きつとお母さんに叱られる」と思いながら、後悔の念とともに重い足取りで帰り着くと、正直に告白した。するとそこで母親の予想外の言葉に出会う。「お前、うまいことやったね!」と頭をなでられたのである。人の物を盗めば、お母さんが喜んで誉めてくれる、そう思った五右衛門。

この時が、五右衛門の泥棒の始まりであった。もし母親が、人の物を盗むのは良くないことと、息子の行為をとがめ正していれば、五右衛門は大泥棒にならずに済んでいたかもしれない。このように人との出会いはその人の人生に大きな影響を及ぼす。

平成二十七年年度の学院本科生三十二名・特科生五名さらには、カナダのトロントから本部研修生一名も体験入学されている。いろんな意味から、時に責任の大きさを、とても深く感じさせられる。学院生は、ご霊地に身をおき、人に出会い、自分に出会い、祈りに出会い、神に出会い、教祖に出会う。この限られた時間と空間の中で、多くのことに会う。その一つひとつが、「神人の道」を開く出会いとなることを切に祈りつつ、ともに育てていただきたいと願う今日この頃である。

ありがとうございます。

学院修業について

学院次長 坂口 光正

学院生活は入学式の前日、五月十四日の午後に入寮式から始まります。入学式は、黒衣で羽織袴の正装ですが、入寮式は、学院に來たままの格好です。不安げな面持ちの新入生も、翌日の入学式では一変して本部広前の修行生らしくなります。それでも、指導する一年先輩のOBに比べれば、ぎこちない着こなし、堅い挙動、付け焼き刃の姿であることは一目



覚筆写



信行輔導期間

瞭然です。それが、一カ月経ち、特科生が入学する頃には、参拝時の黒衣姿も板につき、何も分からない特科生に対して、自分たちが入学当初不安だった気持ちと、受けてきた指導を思い出し、OBにも負けないくらいに丁寧なお世話が出来て来ようになります。毎年見る光景ではありますが、学院の伝統が学院生を育てていく、それは見事なまでのお働きであると思わされます。

現在、学院教育の目的は、「教師の基本である結界取次者として必要な基礎的内容を養うこと」であるとされています。そのための取り組みを始めて四年目になります。

学院修行の中心には、その日一日の結界奉仕を勤める「奉仕」の存在があります。特に、本部広前と学院広前への参拝は、奉仕・副奉仕を先導が導く形式をとります。食事においても奉仕・副奉仕を上座に据えて、金光様のお手代わりとして、役柄に奉仕する姿勢を培うと共に、他の学院生は、奉仕を頂き、奉仕に取次を願



図書館見学



園芸風景

うことよって、奉仕を奉仕たらしめていく役割を担うことになりました。これは、学院が長い歴史の中で培ってきた、修行形態であると言えましょう。

取次者とはどういう存在か、教師として御用にあたっていても、すぐには答えられない問いではないでしょうか。しかし、難儀な氏子が助かるという神の願いには疑いの余地はありません。お道の教師は、生涯かけて、難儀な氏子を取次ぎ助ける取次者のあるべき姿を自らに問いかけ続けるしかありません。学院生が踏み出したその旅の第一歩を、職員も共に、日々新たに求めたいと思います。

一日の信行内容

(時間)	(信行内容)
5:20	起床
5:40	参拝出発
6:00	本部広前御祈念・洒掃
7:30	朝食
8:30	朝礼
9:00	午前授業
11:50	洒掃
12:30	昼食
13:30	午後授業
15:20	参拝出発
15:40	本部広前御祈念・洒掃
16:40	お退けお見送り・洒掃
18:00	夕食
19:00	夜御祈念
	自修・入浴
21:00	閉門
22:00	消灯

人事関係

・次長横山勇喜雄、四月十七日付で辞任。
 ・講師坂口光正、四月十八日付で次長に任命。
 ・教師三好光一、四月十七日付で講師に任命(教学研究所より異動)。

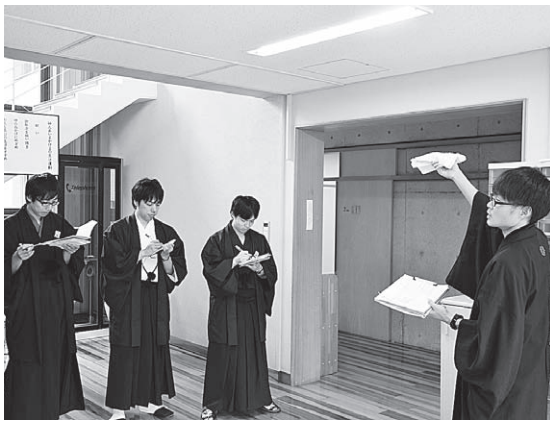
講義科目・担当者

布教科目	教団科目	教祖科目
直信・先覚 結界取次 各種活動 礼典(祭式) 礼典(祭詞)	教団史 教制 教団活動	教祖概論 教祖 教祖 教義
眞田奈保子 安武 秀信 安部 美雄 堀江 芳則 田中 照彦	三好 光一 木村 正明 高橋 斉	堀尾 光俊 坂口 光正 佐藤 光貴 加藤 実

「1」までの歩み

■ 信行輔導期間

学院では、学院生活の基本日課を習得し、ここからの修行の指針を見出すために十日間の信行輔導期間を設置している。前年度の卒業生であるOBから、奉仕・待命・炊事・洒掃を中心とした生活全般の指導を受けた。本年度の本科生三十二名は慣れない黒衣に身を包み、OBの説明に意識を集中させ、修行生としての在り方を学んだ。OBの行き届いた指導により、十一カ月の学院修行の基礎が出来上がり、新年度が開始された。



寮内指導

本年度のOBは以下の通り。(敬称略)

- 石橋祥次郎 (福岡・久留米)
- 池田 豊一 (大阪・阿倍野)
- 山田 悠輔 (大阪・片江)
- 杉田 満平 (山口・由宇)
- 安部 輝道 (兵庫・小野)
- 竹内 恵 (福岡・合衆)
- 佐藤美貴栄 (佐賀・相知)
- 池田真名美 (大阪・阿倍野)

■ 聖蹟巡拝

聖蹟巡拝は、教祖様ゆかりの地を訪れ、教祖事蹟への理解を深めることを願いとして実施している。六月十九日は、本科生・特科生合同で教祖様ご生家方面に赴いた。荒神社、早馬神社、西側の墓地(金光家遠祖歴世親族家族之奥城)などを巡ってご生家まで歩き、ご当主・香取航師から、教祖様にまつわるお話を伺い、教祖様直筆の天地書附他、貴重な遺品を拝見した。また、教祖様実父である十平様が幼少の教祖様を背負って参ったとされる泉勝院では、葉上住職から寺院の縁起、ご自身が住職となられた経緯等、示唆深いお話を賜り、修行の上に貴重な体験をさせていただいた。そこから占見村の氏神の大宮神社まで山道を歩き、拝殿で揃って昼食をいただき、帰院した。

七月三日には、本科生が三グループに



ご生家

分かれて木綿崎山周辺の聖蹟を辿った。この他、今秋には西大寺観音院、吉備津神社、鞆津祇園宮等を訪問する予定である。

■ 平和学習

世界真の平和のご神願成就への祈りを新たにすることを願いとし、例年平和学習として広島を訪れている。

今年には戦後七十年の節年でもあることから、平和学習に先立って、学院生自らが企画して、戦前戦中の教団について学び、本部主催の講演会(テーマ「戦後七十年・被爆七十年を迎え、あらためて本教の平和観を考える」)にも参加し、事前に平和への問題について考える機会

をもって臨んだ。

七月二十日の当日は、広島平和記念公園の慰霊碑を巡り、原爆で亡くなられた方々へ祈りを捧げ、折鶴を献納した。続いて、語り部岸田弘子氏による被爆体験談を拝聴した。その後、岸田氏の話进行い起こしつつ、平和記念資料館を見学し、戦争の残酷さ、今なお残る原子爆弾による被害の悲惨さを体感した。

午後からは、第七十回金光教広島平和集会に参加した。原爆死没者慰霊祭では、奉仕が代表して玉串を奉奠し、その後、学院生全員が合唱奉仕に参加し、「爽竹桃の子守歌」「ピリブ」「ひろしま平和の歌」を歌い、慰霊と平和への祈りを捧げた。



広島平和学習

■文化活動

学院では、教師としての基礎的素養を身につけ、深い人格形成に資することを願いとして、文化活動を設定しており、学院生は、典楽、華道、茶道、書道のいずれかを選択し、毎週水曜日の午後に実施している。

典楽／十二名(男子八名 女子四名)

典楽(講師・岡本庄一師・金光あかり師)は、金光教典楽会より講師を迎え、学院生は箏・笙・龍笛・箏のなかから楽器を選択して、練習を進めている。未経験者も多く、初めのうちは音が出ないなど苦労したが徐々に上達し、お互いにコツを教え合い、刺激し合いながらステップアップしてきた。秋には学院広前で執り行われる霊大祭に奏楽の御用をいただいているため、一音一音に真心を込め、神様に喜んでいただけるよう練習を積み重ねている。



華道／四名(男子四名)

華道(講師・早川さなゑ師)は、池坊の流派の正風体生花、新風体生花、自由花等について学んでいる。師の丁寧な指導のもと、学院生は、心を込めて花を生け、生けた作品は、学院広前や、教室棟の廊下に飾られ、学院内を華やかにしている人の心を和ませている。

ここから、毎回の稽古を通して、一本の花の美しさや、命の尊さを実感し、調和の取れた命の輝く世界に触れることで、華道の奥深さを感じてほしいと願う。



茶道／六名(男子四名 女子二名)

茶道(講師・太田裕子師)は、六名の選択者が敷内という流派を学んでいる。はじめて触れるお茶の道具の扱いに戸惑いながらも、自分や人がたてたお茶を五感で味わい、毎回異なる季節の美しいお菓子に心弾ませながら、一人ひとりが



お点前を身につけるため稽古に励んでいる。これからお点前だけでなく、茶道具や書、軸、茶花などについても学んでいく。

書道／十一名(男子六名 女子五名)

書道(講師・中桐真彦師)は、先生の丁寧なご指導の下、書道の経験者から、不得手だという者まで、それぞれが一生懸命稽古に取り組んでいる。回を重ねるごとに上達している様子を伺うことができ、大変ありがたい。

本年も、生神金光大神大祭に合わせて学院書華道展を開催させていただき、それぞれが思いを込めた字を書いた半切を展示する。また学院合同茶会では色紙に好きな文字を書いて披露する予定もあり、今後とも先生のご指導を仰ぎ、稽古に勤しんでいきたいと願っている。



日程

(夏期在籍教会実習まで)

5月	6月	7月	8月
14	1	1	1
15	28	2	3
15	27	3	10
24	26	17	18
25	25	18	19
24	24	19	20
15	23	17	27
15	15	16	28
15	11	17	29
14	11	18	3
14	15	17	10
14	15	16	17
14	15	17	18
14	15	18	19
14	15	19	20
14	15	26	27
14	15	27	28
14	15	27	29
14	15	27	30
14	15	27	31
14	15	27	1
14	15	27	2
14	15	27	3
14	15	27	4
14	15	27	5
14	15	27	6
14	15	27	7
14	15	27	8
14	15	27	9
14	15	27	10
14	15	27	11
14	15	27	12

特科生 卒業



今年度の特科生五名(男子二名、女子三名)は、六月十七日に入学し、七月十七日までの一カ月間に及ぶ学院修行を進めた。

教典ゼミ・祭式・祭詞等の学行は特科独自のカリキュラムを編成し、参拝、洒掃、炊事等の信行は本科生の班に加って行った。

それぞれが教師としての基礎的素養を習得し、ここから御用に立たせていただく心構えができたようである。

また、本科生と同じ場で修行する中で、お互い刺激し合い、磨き合うことができ、共にここからの修行成就、御用成就を祈り合うことができるのは、大変ありがたいことである。

神様のお計らいを受けて



山口県・宇部東教会
清水 幹生

平成二十三年三月十一日、東日本大震災発生。その報道を見て、私はいてもたってもいられなくなり、翌月二十二日には被災地の助けになりたいと思い気仙沼に入り、四年間のボランティア活動が始まりました。

しかし、実際は、被災者の辛い悲しい話を聞くことしかできず、その心を癒すことのできないもどかしさを感じました。そんな中、昨年五月に大腸がんが見つかりました。



卒業証書授与式

り手術を受けました。「なぜ神様は命に関わる大病をさせなされるのか」と思いましたが、被災者からの励ましという言葉が私の支えになりました。また、手術後、教会長先生より、学院入学の話をいただき、迷いもありましたが、自分に足りないものを求めて、学院入学を決めました。

学院で、ご霊地のお徳や、学院長先生の信心に触れ、自分には「神心」が足りないということを改めて痛感し、また、私に神様からかけられた願いにも気づかせていただきました。神様の願い、それは、ここまでの人生を基に、生神金光大神様に助けていただきながら人を助ける御用に邁進すること。そのことを胸にここからの御用にあたりたいと願っています。

難はみかけ



徳島県・徳島西教会
筒井 善子

金光教徳島西教会の子弟として、神様のお恵みの中で、願ひ祈られてお育ていただきました。今年二月、祖父、母の式年祭をお仕えし、お霊様の強い思いを神様がお受け取り下さり、思いがけず金光学院特科入学という有難いおかげを蒙りました。



教話実習

金光様のお取次をいただき、本科生の皆さんのときばきした行動と指導に感嘆しつつ、黒衣に身を包み、修行生としての日々が始まりました。そんな中、朝夕の本部広前参拝の道中に右足つけ根が痛むようになりました。「神様はいつたい私に何を？」と思い、お届けお伺いをすると、金光様からは「今まで使わせていただきお世話になった足にしっかりと礼を申させてくださいませよう」、学院長先生からは「神様の杖をつかせていただきますませよう」とのお言葉をいただきました。学院生の優しさに支えられ、激痛に堪えながら必死で心中祈念をし、神様に心を向けました。神様はこの痛みを通して「一心に願う心」をお育て下さったのだと感じています。

学院生の声



三カ月を振り返り



香川県・苗羽教会
細川 大輔

僕は学院に入るまで金光教には全く興味が無く、入学の動機も「両親を安心させたい」というくらいのもので、「取り敢えず一年間辛抱すればいい」としか思っていませんでした。学院に入学し



授業風景

三カ月の学院生活を振り返ってみると、入学当初は「神」「信心」という言葉に抵抗を感じるばかりで、何とかみんなに合わせてようと話に入っていました。けれども、話についていけず、歴然とした差を感じ、やはり「此処は僕の来る場所ではない」と思いました。

しかし、日々生活を送る中で今まで「当たり前だ」と思っていたことが、ありがたいと感じるようになりました。三食をいただくこと、お風呂に入ること、睡眠を取ること、どれもありがたいと思わせていただいています。また、良き同期とも出会えたことが一番だと思います。色々なことに気づかせてもらえる学院に入学して、今は素直に良かったと思えます。今の環境に狎れてしまうことのない様、一日一日を大切に過ごさせていたいただきたいと思っています。

多くのおかげの中で



福岡県・秋月教会
林 百香

日々、金光様をはじめ多くの方々の厚きご祈念をいただいで学院生活を送らせていただいております。入学して三カ月が経ち、み教えの「神様は、氏子の身の上

にけっして無駄事はなされない」ということを実感させられました。ここまでにいただいた御用を通して、無駄な事は一つなく有り難いことだなと思わせていただきました。入学式の会食時のスピーチに始まり、ミュージックフェスタのアンタウンスと、今までに経験したことのないことばかりで、私に御用させていただけるのか不安でした。しかし先生方に「おかげをいただいたね」と言っていたら、これがおかげなんだと嬉しく思いました。自ら気付き、お礼申すことが大切だと身をもって気づかせていただきました。

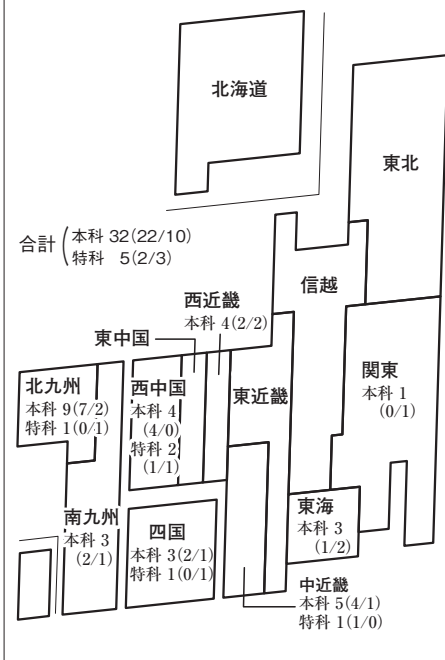
私は学院への入学を自ら決断してきたと思っていました。しかし、学院長先生が「どれほどの親の祈りや願いがあつて今の自分があるのか」と話された時に、今日までずっと祈られて多くのおかげの中で生かされて

いたんだと実感し、涙が溢れてきました。

これから同期と共にご修行に励み、神様に喜ばれる御用をさせていただけるようになりたいです。

平成27年度 教区別入学者数

()内の数字は男/女



自主企画



作業風景



教団独立記念祭
御用奉仕